



# 地球への感性

vol.2

国連子供環境ポスターによる学びの実践



## はじめに

『国連子供環境ポスター原画コンテスト』の応募作品には世界中の子どもたちの地球や環境を大切にしたいという強い想いがこめられています。その共通の想いは、民族、年齢などにより異なるさまざまなモチーフで表現されています。

総合地球環境学研究所では、これら子どもたちの目を通した、人間と地球環境の関わりを映し出す作品群を、20万点以上収蔵しています。絵は常に私たちに問い続けます。私たちは何をしてきたのか、どこへ向かうのか、と。それと同時に、絵は教えてくれます。私たちは同じ地球の上でつながりあっているのだ、と。

これらの作品群や作品を活用した教育ワークショップ実施報告を『地球への感性—創造的な鑑賞による学びの実践』（2011）という冊子にまとめてから6年が経過しました。その間、新しい作品が次々に総合地球環境学研究所にやってきました。また、それらを活用した教育ワークショップにもさらなる創意工夫が加えられ、世界のさまざまな場で紹介され、反響を生んでいます。

今回、その新たな作品や環境教育実践を盛り込み、続編を刊行することとなりました。尚一層、世界中の子どもたちの想いが伝播し、新たなつながりを生み出していききっかけとなることを願ってやみません。

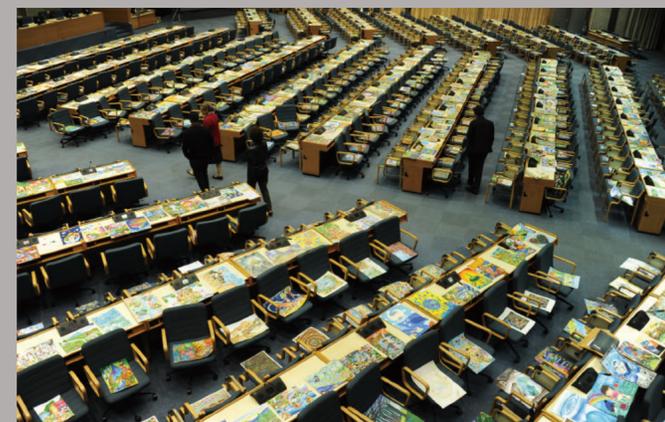
何卒ご高覧いただき、ご活用いただければ望外の喜びです。

総合地球環境学研究所

阿部 健一

## 国連子供環境ポスター原画コンテスト

『国連子供環境ポスター原画コンテスト』は、国連環境計画（UNEP）と、地球環境平和財団（FGPE、日本）が、民間企業の協力等を得て、世界の中学生以下の子どもを対象に行っている事業です。毎年環境問題に関わるテーマを掲げ募集を行い、まず国連の6つの地域事務所（アジア・太平洋、西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、中米・南米）で予備選考を行います。その後、上位作品はケニアのUNEP本部、日本、ヨーロッパなどで実施されるグローバル部門の最終審査に臨みます。優秀作は国連のカレンダー・絵葉書等に採用されるほか、世界各地で国連の行う環境に関わる催し物の折に展示されています。総合地球環境学研究所はこの事業の協力機関であり、コンテストの全応募作はすべて総合地球環境学研究所に寄贈されています。



グローバル部門審査会の様子 UNEP本部（ナイロビ）

## Contents

### 国連子供環境ポスター

生物多様性	4
水のいのち	6
食料廃棄	8
地球環境問題群	10
紛争	12
地域の暮らし	14

### 学びの実践編

ワークショップという学びの方法論	16
国連子供環境ポスターと活動の軌跡	17
多文化時代の世界観と環境 飯塚宜子	18
ワークシート 子どもたちの読み解き	19
Workshop Design ① 学芸員になってみる	20
絵画鑑賞から始まる3つの学び 佐藤優香	20
Workshop Design ② カルタをつくる	22
Workshop Design ③ 絵にタイトルをつける	25
Workshop Design ④ 水のオノマトペ	26
Workshop Design ⑤ 絵本をつくる	27
Workshop Design ⑥ 絵の世界で変身	28

あとがき 阿部健一	30
-----------	----

Workshop Design Members	31
-------------------------	----

# 生物多様性

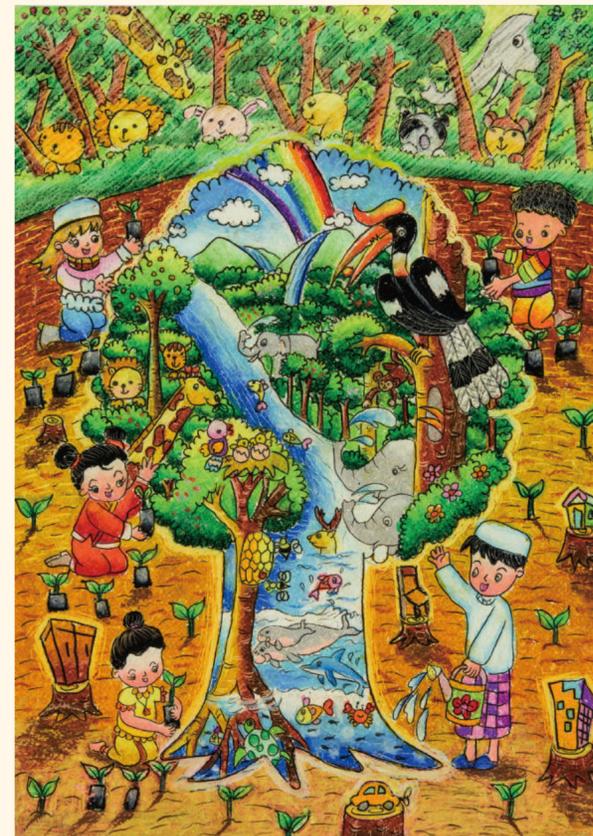
つながるいのち



Jaakko Heikkilä, フィンランド (14才, 2010年)



Giovanna Lumy Mori Oda, ブラジル (13才, 2011年)



Wigavee Rattamane, タイ (8才, 2010年)



Lim Hiu Yan, 中国 (14才, 2010年)



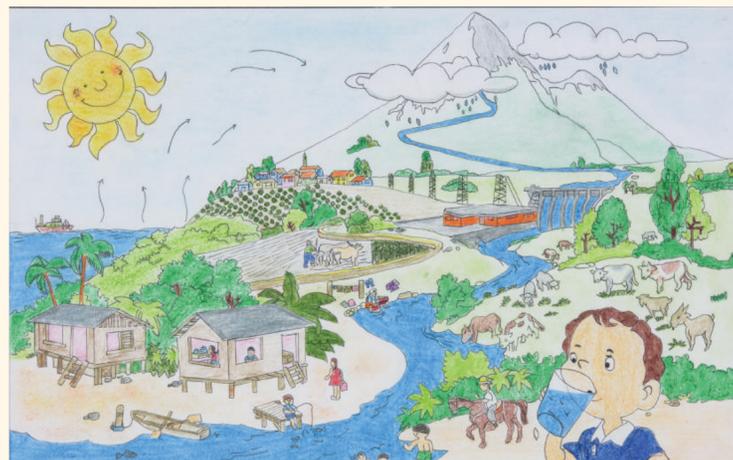
Lenila Lebariya, ケニア, Samburu tribe (10才, 2003年)

# 水のいのち

地球を巡る水



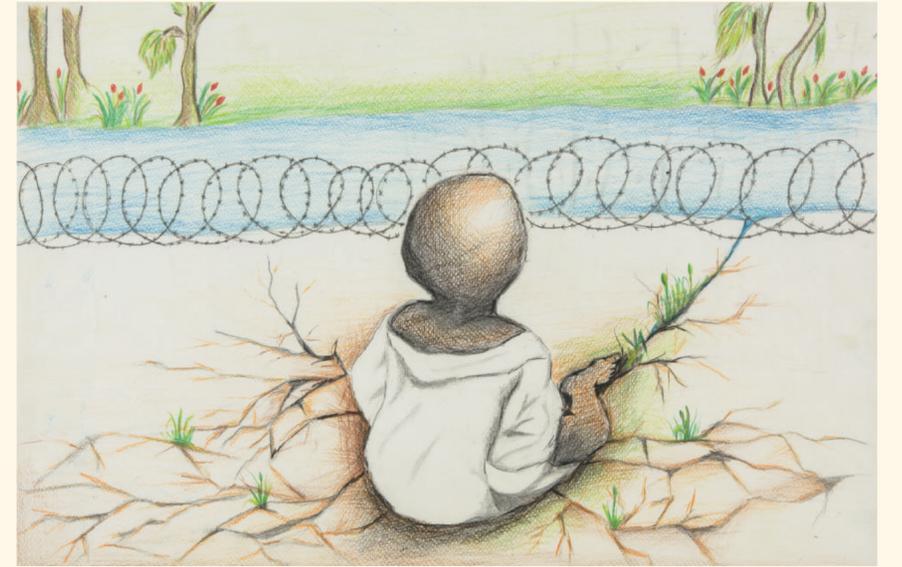
Michell Lai, カナダ (14才, 2013年)



Nombre Vanessa Lugmaña, エクアドル (13才, 2012年)



Mohammed Zoheb, アラブ首長国連邦 (13才, 2013年)



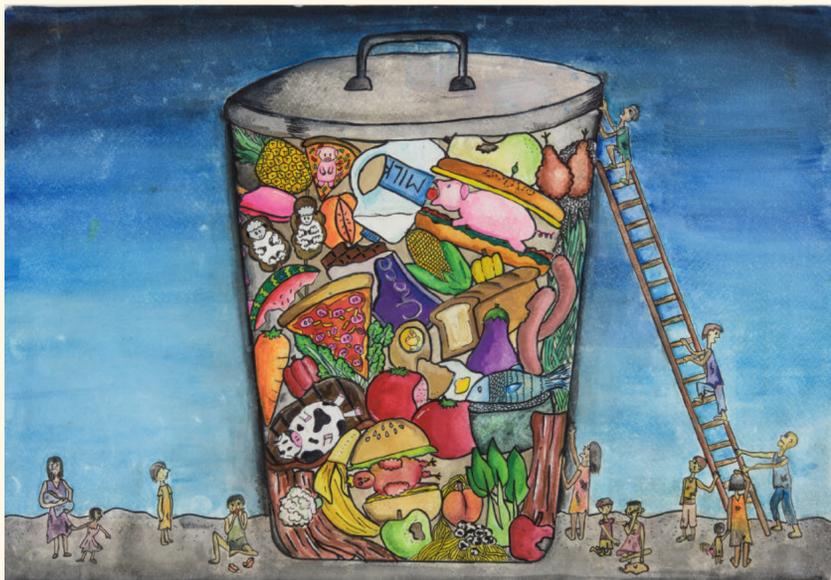
Wafe Abed Al Kareem, ヨルダン (15才, 1999年)



石川英里, 日本 (14才, 2013年)

# 食料廃棄

生存と経済格差



Saya Dixit, シンガポール (インド出身、11才、2014年)



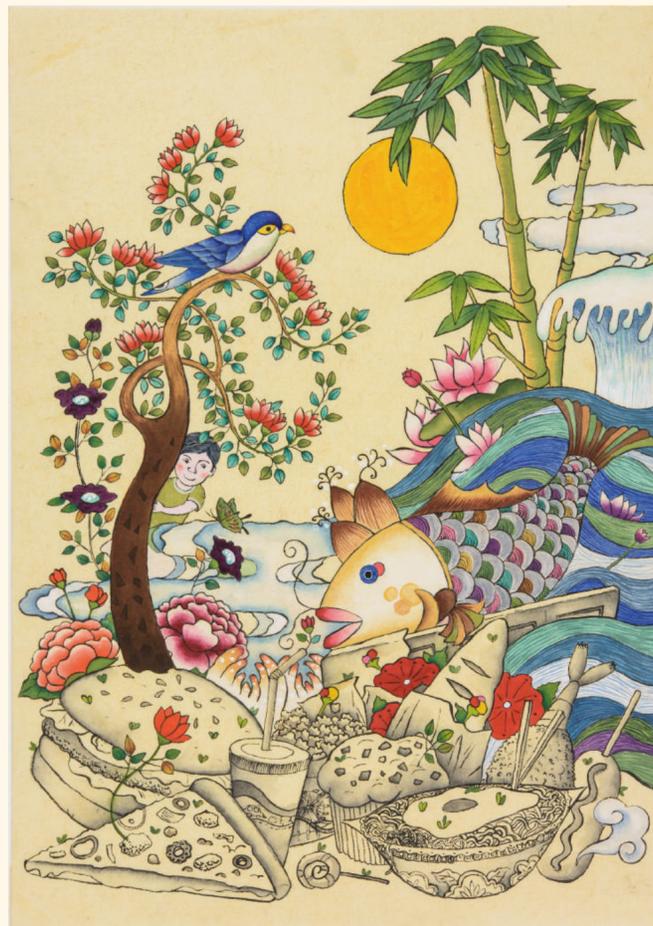
Kiyana Bakhtiyari Fard, イラン (12才、2014年)



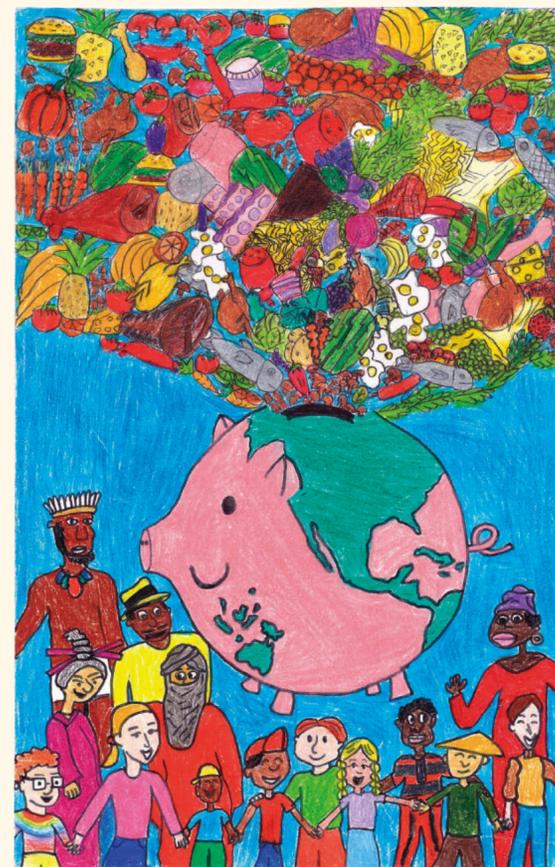
Anargi Shakya Walimuni Mendis, イギリス (8才、2014年)



Sami Asim Khan アメリカ合衆国 (13才、2014年)



Seohan Jung, 韓国 (14才、2014年)



Yahsek Baruc Gonzalez Ramirez, メキシコ (9才、2014年)

# 地球環境問題群

今起こっていること



Zakharov Vova, ロシア (11才, 2009年)



Fohwi Lawrence, カメルーン (13才, 2011年)



A. Sridhar, インド (15才, 2001年)



Diana Fan, アメリカ合衆国 (13才, 2012年)

# 紛争

人類の愚行



Mariam Yousef Nagib Hama, エジプト (2002年)



Mohamad Nasser Atallah, パレスチナ (2002年)



T.P. Nilushika Tharangani Guruge, スリランカ (13才, 2003年)



Reshad Monsur, バングラデシュ (10才, 2002年)



Malek-Jalal Halawani, レバノン (11才, 2002年)

# 地域の暮らし

豊かさとは何か



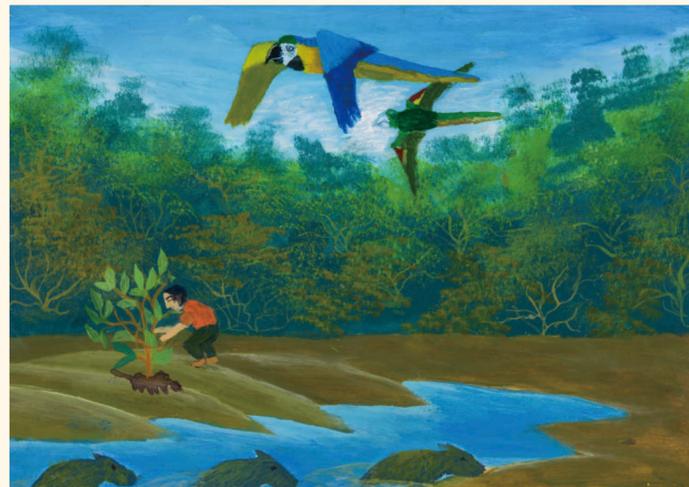
Abdelmoura Wafa, チュニジア (10才、1999年)



Ma Phyu Hnin Oo, ミャンマー (11才、2004年)



Cheraghian, イラン (13才、2012年)



Joel Ahanari Melendez, ペルー (13才、2011年)



Jamis Al Jamali, シリア (12才、2005年)

## 学びの実践編

### ワークショップという 学びの方法論

「すごい」。国連子ども環境ポスターを見る人が、たいてい発する最初の言葉である。想像したこともなかった遠い国や地域の子どもたち。その子どもたちが見たもの、感じたもの、心の奥底にあるものが、目の前にある。それらは多様で、強く、静かに、私たちの心を揺さぶる。そして私たちは、その通奏低音に気づくのだ—「ぼくたちはかけがえのないこの地球の上で、生き続けたい」。この類いまれなるコレクションを活用した環境教育活動を、「ワークショップ」という手法で行っている。

#### 1つの正解を求めない学び

アート、まちづくり、企業研修、学術会議、環境教育など、今日、多くの分野の人々が、さまざまなワークショップを実施している。ワークショップは「工房」である。1人ひとりが自分の身体とところを使い、その人にしか創れないものをつくる。「工場」であるファクトリーで、1つの設計図に則って、同じ規格のものを大量につくるのではない。私たちは、1つの正解を教わることに慣れ過ぎ、誰かが解決策を教えてくれることを待っていないだろうか。世界では紛争、気候変動、人権、経済格差、環境破壊など、根の深い問題群が広く複雑に絡み合い、誰も1つの正解を示すことは出来ないというのに。

北米先住民の口承史は、困難にあたった人間は、輪になり、座し、お互いを傾聴する中で、生きのびる知恵を出し合ってきたこ

とを教えている。日本人も、寄り合い、講、結、などの集いあい、語り合う伝統を持っている。世界中で人間は、長い歴史をそのように生きのびてきたのかもしれない。ワークショップが楽しいのは、人間にとって「根源的な喜びを内在\*」した方法だからだ。自分の身体や心で感じたことを、受け入れてもらえる安心感の中で、言葉にする。聴き合い、認め合い、新しい発想や気づきを生む。それはシンプルで確かな平和や公正の方法でもある。この地球に「生き続けたい」と真摯に語る多様な子どもたちの絵と共にある学びの方法論は、ワークショップが適切だと私たちは考えるのである。

#### つながりと多様性

世界中の子どもの絵は、彼らが生きる地域の自然環境、社会情勢、文化などが極めて多様であることを教えてくれる。テレビでは他人事のように見えた、馴染みの薄い宗教や文化のカタチも、子どもたちの目を通して、その手によって素直に描かれることで、その抜き差しならない「かけがえのなさ」が心に落ちる。自分と異なる多様性を受け入れる回路が開くのである。それと同時に「同じ地球にいる」ことが、現実として腑に落ちてくる。普段の生活の中で見えにくい、多様な地域、多様な自然、多様な社会情勢の中に生きる子どもたちと、同じ地球の上でつながり、共に生きていることも、ワークショップを通して感じとることができるのである。

飯塚 宜子

\*中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場—』岩波新書(2001)



## 国連子供環境ポスターと活動の軌跡

- 1991** 第1回国連子供環境ポスター原画コンテスト開催  
「21世紀に残そう!美しい海・空・森」UNEPとともに国連本部に優秀作を展示
- 1992** 第2回国連子供環境ポスター原画コンテスト開催  
(地球環境平和財団、UNEP主催)、コンテストは以降毎年開催
- 2000** 原画コンテスト応募作品を国立民族学博物館へ寄贈の覚書締結
- 2001** 「わたしたちの地球:世界子ども環境ポスターの語りかけるものワークショップ」を開催。  
(日本生命財団研究助成、代表:阿部健一)  
会場:愛媛大学附属高等学校(松山市立桑原小学校児童を対象)
- 2003** 「第3回世界水フォーラム」ポスター原画展示  
会場:国立京都国際会議場 国立民族学博物館ブース
- 2008** 国連子供環境ポスター原画を国立民族学博物館より、総合地球環境学研究所へ移管  
「学芸員になろうワークショップ」と展覧会を開催  
会場:立命館小学校(京都府)
- 2009** 「第5回世界水フォーラム」連携展示ポスター発表  
開催国:イスタンブール  
「学芸員になろうワークショップ」と展覧会を開催  
会場:金沢大学附属小学校(石川県)
- 2010** 「カルタワークショップ」を開催  
会場:日進市立西小学校(愛知県)  
「カルタワークショップ」を開催  
会場:河合町立河合第三小学校(奈良県)  
「カルタワークショップ」を開催  
会場:金沢大学附属小学校(石川県)  
展覧会の実施  
会場:石川県立音楽堂コンサートホール  
金沢大学附属小学校による「かしねコンサート」会場にて  
展覧会の実施  
会場:石川県立音楽堂邦楽ホール(石川県)  
地球研地域連携セミナー「にほんの里から世界の里へ」会場にて  
国連子供環境ポスター グローバル部門審査会  
会場:総合地球環境学研究所(京都府)  
地球研地域連携セミナー「多様性の伝え方」成果展示の実施  
会場:名古屋大学豊田講堂(愛知県)  
COP10生物多様性交流フェア会場 成果展示  
会場:名古屋国際会議場エキスポゾーン(愛知県)  
国連子供環境ポスター グローバル部門審査会を総合地球環境学研究所で開催
- 2011** 「カルタワークショップ」を開催  
会場:エイトリウムスクール(アメリカ合衆国)  
「絵にタイトルをつけるワークショップ」と展覧会を開催  
会場:ボストンチルドレンミュージアム(アメリカ合衆国)  
「絵本をつくるワークショップ」および展覧会を開催  
会場:国立台東大学附属小学校(台湾)  
「カルタワークショップ」を開催  
会場:愛知県立大学、モリコロパーク(愛知県)  
「地球への感性〜創造的な鑑賞による学びの実践」刊行
- 2012** 「水のオノマトペワークショップ」「水の記憶ワークショップ」を開催  
会場:同志社小学校(京都府)  
「第6回世界水フォーラム」にて「水のオノマトペワークショップ」  
「水の記憶ワークショップ」を開催  
会場:Parc Chanot(フランス)  
「子ども鑑賞発見学デー」にて「絵にタイトルをつける」ワークショップを開催  
会場:文部科学省(東京都)

- 2013** 「国際コモンズ学会第14回世界大会」にて、「絵にタイトルをつける」ワークショップ  
および「絵から詩をつくる」ワークショップ  
参加:学会参加研究者  
山梨県立富士北稜高等学校生徒  
会場:地場産業会館(山梨県)  
「おんしりん森づくりフェスタ」にて「OSUSOWAKE」ワークショップを開催  
会場:ふじさんホール・富士吉田市民会館(山梨県)  
「子ども鑑賞発見学デー」にて、「子どもの絵で世界一周!」ワークショップを開催  
会場:文部科学省(東京都)  
「子ども鑑賞発見学デー」にて、「地球環境問題と戦う妖怪ワークショップ」を開催  
会場:文部科学省(東京都)  
「地球研オープンハウス」にて、「地球環境問題と戦う妖怪ワークショップ」を開催  
会場:総合地球環境学研究所(京都府)  
「世界の子どもたちの地球想い展—国連子供環境ポスター原画コンテスト作品集」刊行  
**2015** 「第7回世界水フォーラム 日韓交流事業」にて、「絵の世界で変身ワークショップ」を開催  
会場:世宗小学校(韓国)  
「絵の世界で変身ワークショップ」を開催  
会場:長久手市文化の家(愛知県)  
「絵の世界で変身ワークショップ」を開催  
会場:芦屋国際中等教育学校(兵庫県)  
「第7回世界水フォーラム日本パビリオン/市民フォーラム会場」にて、成果展示  
「Mainstreaming a New Water Ethic」セッションにて成果発表(韓国)  
「Citizen's Forum」セッションにて成果発表(韓国)  
「水への感性—絵の世界の降り立った子どもたちは何を感じたのか」刊行  
**2016** デジタル教材開発とアップロード  
・アクティブラーニング教材①「Water 水」  
・アクティブラーニング教材②「Nature and Region 地域と自然」  
・「Lesson Plans for United Nations Children's Environmental Painting Workshop」  
・「ワークショップ授業事例集」



# 多文化時代の 世界観と環境

飯塚 直子 (京都大学東アジア地域研究研究所 研究員)

## グローバル時代は多文化時代

現代の情報やモノは、世界の地域と地域をより緊密に往来し、より即時的につなぐ。便利さの一方で、地域において受け継がれてきた慣習や、人々、人と自然の関係性は変容していく。しかし世界が均一になるわけではない。それぞれの地域に根ざす所与の条件や事情は様々で複雑だ。もたらされた近代化の波紋は、地域の文脈の中に取り込まれ融合されていく。多様な文化は、大きく変容しながらも、生き続ける。私たちは多文化時代に生きている。

今日、グローバルな課題群、例えば貧困格差や紛争、そして地球環境問題が、対岸の火事ではないことを、私たちは知っている。大気や水に国境を超えるなどと言うことは出来ないし、禍災の焦土、自然破壊などの遠因が、他でもない、私の今日の暮らしと関連していないと、誰も言い切れることは出来ない。グローバル時代の多くの課題はあらゆる人が当事者であり、状況を変えていかねばならないことも、私たちは知っている。

## 近代と伝統の教育の方法論をふりかえる

今日、持続可能な世界を未来に構築するために、「教育」の重要性が語られる。近代の普遍的教育の機会を、すべての子どもたちに保障される必要がある。それは自らを取り巻く自然や他者を、客観的に捉え、分析的に観察し、事実を精緻に記録する方法論によって基礎づけられる。文字化される知識の体系を蓄積し、他者理解に近づくことは、現代世界を生きる次世代の子どもたちに必要な資質である。

それと同時に、私たち人類は、文字化が困難な類の他者理解の方法を持っていた。例を挙げれば、他者の中に自己を見ることを教えるフィリピン人のKapwa、北米先住民の自らを水の一部、自然の一部とする教え、日本にも身土不二、主客一体など、他者や自然と自らをわけ隔てない認識方法が認められる。他者を分析的にではなく、「内的的に捉える」方法論と言えるだろう。人間が資源として利用するだけではない、もう少し大きな自然環境、他者の見方を教えるものであり、持続可能な世界観への一つのヒントになり得るものかもしれない。

## 子どもたちによる世界の環境の絵が持つ可能性

多文化時代に生きる次世代の子どもたちは、その両方の方法論の価値と手法を学ぶことが望ましいのではないだろうか。少なくとも、他事を、当事者として捉えてみる機会、他者を内的的に捉えてみる機会を、私たちは子どもたちに、教育機会として、用意し、提供することが必要ではないか。

世界各地の子どもたちの絵には、言語化されない無意識レベルの世界観、土地における関係性の中で息をする深い自然観、そして生存への危機感、絶望感、無力感、あるいは強い希望が詰まっている。それらを「内的的に捉えることができるなら、学習者は多様な世界が地球上にあることを、それと自分は異なるけれど共有できる何かがあることを、その意味の重要性を、心に刻むことができるだろう。

# ワークシート 子どもたちの読み解き

子どもたちが、100枚の「国連子環境ポスター」の中から気になる絵を1枚選び、絵と対話しながら、自分なりの気づきや考えを綴ったワークシート。自分と絵との距離を少しずつ縮めていった軌跡がここにあります。

The collage features 100 individual worksheet pages, each with a drawing and a handwritten reflection in Japanese. The drawings are diverse, showing children's interpretations of environmental issues. The reflections are written in Japanese, with many including English text from the drawings. The pages are arranged in a grid-like fashion, overlapping slightly, creating a rich visual texture of children's voices and ideas.

# 学芸員になってみる

## Be a Curator

絵と向き合う時、受動的な鑑賞者ではなく、絵のメッセージを伝える立場（学芸員）になることで、絵に対する深い読み解きが始まります。

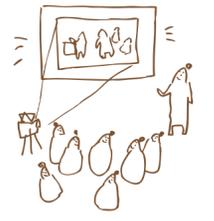
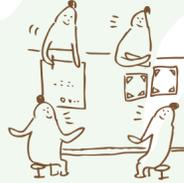
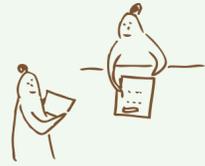
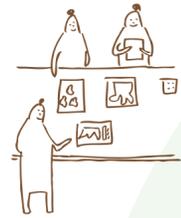
このワークショップでは、子どもたちが学芸員となり、国連子供環境ポスターの絵を読み解き、展覧会をつくります。

「学芸員になろうワークショップ」実施校  
2008年 立命館小学校（京都）  
2009年 金沢大学附属小学校（石川）

出会う

読み解く

伝える



学芸員の誕生

絵を1枚選ぶ

絵と対話する

みんなの読み解きを共有する

伝えるメッセージを話し合う

伝える言葉を考える

作者に手紙を書く

展覧会をしつらえる

展覧会をひらく

活動を振り返る



学芸員として自覚するため、学芸員と書かれた名札と白手袋を渡し、課題を告げた。



タイトルや説明がない絵と向き合い、その中から気になる1枚を選び出した。



「この絵の中では何が起きているの？」  
「この絵のどこを見てそう思ったの？」  
「この絵をかいた人は何を伝えたいのだろう？」  
ワークシートの質問にそって、絵からメッセージを引き出した。



お互いの読み解きを発表し合うことで、相違点や新たな視点をミックスさせていった。



グループに分かれ、自分たちの伝えたいメッセージに従い、展示の構成を話し合った。



自分たちで決めた展示計画に従って、展示の説明パネル、キャプションをつかった。



絵にタイトルをつけ、その由来を作者に向けた手紙として記し、これが絵のキャプションになった。



手袋をはめ、丁寧に絵を扱いながら、展示ボードに貼付けていった。



展覧会では、ポスターの絵の鑑賞と同時に、子どもたちが考えた展覧会のメッセージと活動そのものに関心が向けられた。



展覧会では、ポスターの絵の鑑賞と同時に、子どもたちが考えた展覧会のメッセージと活動そのものに関心が向けられた。

## 絵画鑑賞から始まる3つの学び

佐藤 優香 東京大学大学院情報学環 特任助教

一枚の絵をじっくり見て、自分の読み取りをもとにコミュニケーションする「子どもがつくる国連環境ポスター展」ワークショップの活動は、鑑賞教育の一手法といえるでしょう。このワークショップは鑑賞をきっかけにした、多くの学びの可能性を内包しています。たとえば、コミュニケーション力、言葉による表現力の育成があげられます。また、総合的な学習の時間のテーマとして取り上げられることの多い次の3つの学習に寄与します。

### 環境教育

国連子供環境ポスターは、世界の子どもたちが環境について感じたこと、伝えたいことが表現されています。しかし、その読み取りに正解があるわけではなく、また環境について多くの知識の保持を要求するものでもありません。いずれの絵もみることが地球環境についてのおのずと考えられるように描かれており、絵の中の様子をつぶさにみていくことで、誰もが自己の視点で絵の中の出来事を読み取り、メッセージを編むことが可能となっています。子どもたちは、絵の向こうにいる自分と同じ年代の作者の思いを意識し、第三者へその思いを伝えるという活動を通して、環境問題を他人事ではなく自分の問題として捉えることができるでしょう。

### 国際理解教育

このワークショップで、自分の選んだ絵がどこの国や地域のものであるかが子どもたちに伝えられるのは、活動全体の終盤になってからです。その国名には子どもたちに馴染みのないものも多く含まれています。しかしながら、絵をじっくりみて、描き手のことを慮り、その代弁者になる活動は、描き手とつながっている感覚を自ずと育むということが、子どもたちのコメントから読み取れます。どこにあるどんな地域のことはわからなくても、地球上のだけかと深い関わりを持ったことが実感されていました。だれもがいろんなことを考えていること、遠く離れた場所にあっても共通することがあり共感し合える思いのあることに気づくことが、一枚の絵を介して可能となります。また絵は、使われている紙の質感にも、色づかいにも、なにかその地域らしさがあり、日頃よく目にする日本の子どもが描いたものとは違う印象を

与えます。ポスター全体の持つ個性が文化的背景を伝えてくれています。さまざまな地域の子どもが描いた絵を使うことで、自ずと国際理解がはじまるでしょう。

### 情報教育

活動の中には、情報の受け手としての立場、送り手としての立場の双方が含まれており、子どもは、それぞれの立場から絵や社会と向かい合うこととなります。一方的に絵を解釈するだけでなく、その解釈について子どもたちで吟味する機会（グループによる絵の分類）や、描き手に問う姿勢（手紙）を持つことで、情報の背後にある人や社会、また表象の対象となるものへの真摯な姿勢が育まれます。また、情報を受け取り伝えることの難しさやあやふやさも全てのフェーズの中で感じることができるでしょう。

## Workshop Design ②

# カルタをつくる

Make KARUTA together

日本の伝統的なカードゲームで、子どもも大人も楽しめます。遊んでいるうちに、いつのまにか、カルタの絵や言葉が記憶に刻まれます。このワークショップでは、国連子供環境ポスター作品を絵札にして、読み札に絵のメッセージをのせて自分たちの言葉で綴るオリジナルカルタをつくります。

「カルタをつくるワークショップ」実施校  
 2010年 日進市立西小学校 (愛知)  
 2010年 河合町立河合第三小学校 (奈良)  
 2010年 金沢大学附属小学校 (石川)  
 2011年 エイトリアムスクール (アメリカ)  
 2011年 森と草原の地球教室 (愛知)



### ①絵をじっくりみるためのウォーミングアップ



目隠しチームと絵を見るチームに分かれ、どのような絵なのか、絵の中には何が描かれているのかを、目隠しをしている人たちに教える。これは、絵の中に描かれているものにじっくりと目を向けるためのウォーミングアップ。



### ④絵の作者の住む町を知る



自分が選んだ絵の作者の住む場所はどこなところなのか。世界地図で確かめながら、地球研のメンバーや訪れたことのある大人がその様子を伝えた。

### ②絵を1枚選ぶ



100枚の原画から「気になる絵」を1枚選ぶ。

### ③絵と対話する



「この絵の中では何が起きているの？」  
 「この絵のどこを見てそう思ったの？」  
 「この絵をかいた人は何を伝えたいのだろう？」  
 ワークシートの質問にそって、絵からメッセージを引き出した。

### ⑤カルタの文字をくじきする



50音あるいはアルファベットの全ての読み札がそろるように、読み札の頭文字はくじきでひいた。

### ⑥文字札のアイデア出しをする



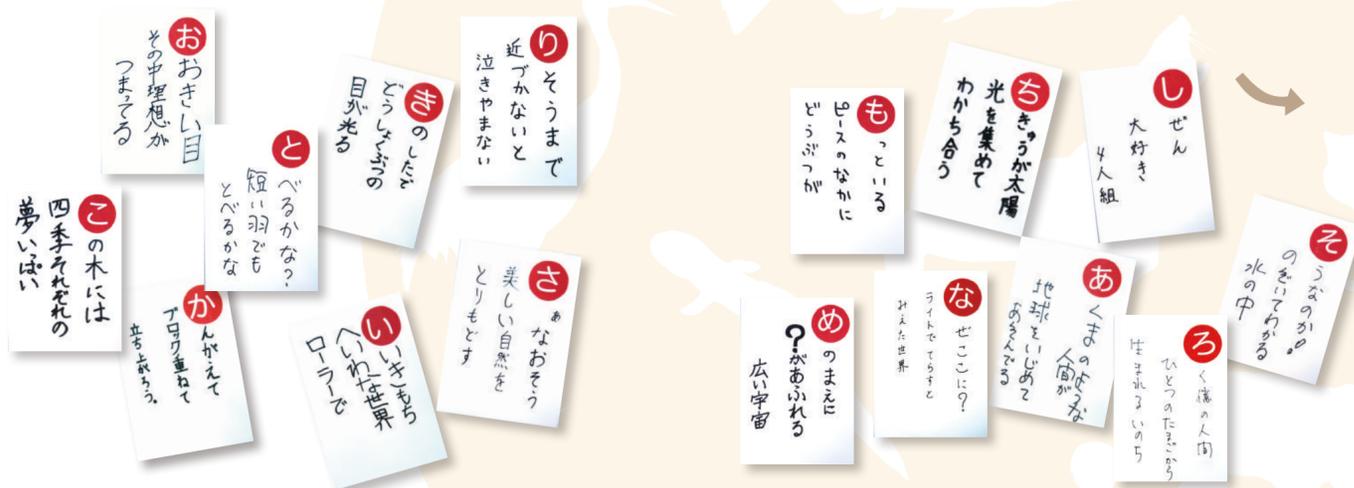
絵札となる絵を眺めながら、文字札の言葉をワークシートに思いっ限り、書き出していった。

### ⑧カルタゲーム



自分たちでつくった世界に1つだけのカルタで遊んだ。

### ⑦文字札を仕上げる



# Environmental KARUTA

本カルタワークショップは、The InSEA European Congress 2010 In Ronaniemi, Lapland, Finland, 21-24 June での発表 "Creation Through the Expansion of Words and Images - The Karuta workshop" 内で実施した "The Happy sounds KARUTA workshop" (kazuji Mogi, Chihiro Tetsuka, ほか) から着想を得たものです。(The InSEA European Congress 2010 program and abstracts p.145)



## Workshop Design ③ 絵にタイトルをつける

Give a Title

ボストン チルドレンズ ミュージアムでは毎年「お正月イベント」が開催されます。獅子舞、和太鼓、墨流し、お餅つき、茶道、福笑いなどの日本文化に触れるイベントです。その一環として「カルタワークショップ」を開催しました。

「絵にタイトルをつけるワークショップ」実施場所  
 2011年 ボストンチルドレンズミュージアム (アメリカ)  
 2012年 Parc Chanot (フランス)  
 2012年 文部科学省 霞が関子ども見学デー (東京)



CHOOSE



100枚の絵の中から1枚選んだ。

LOOK



国連子供環境ポスターの原画展示。まずは原画の美しさに触れる。

GAME



ミュージアム内にある「京の町家」の座敷で、カルタ遊びを行った。ここでは、日本で行ったワークショップで子どもたちがつくったカルタをもとに作成した英語版のカルタを使用した。

SHARE



AからZまでのアルファベットボードの穴埋めゲームのように、自分の書いた文字札と選んだ絵札を埋めていった。

NAME



絵にタイトルをつけて、頭文字のアルファベットシールを貼って読み札をつくった。

<b>A</b> nimal Trees with the sun and the wind are full of harmony and happiness	<b>B</b> ear holding umbrella, full of life almost as if his real Giraffe stands tall and strong, looking over everyone.	<b>C</b> hildren love children help out Earth, alongside writers	<b>D</b> ecorate the Paintings Meenakshy	<b>E</b> xotic birds and plants dot by the river	<b>F</b> riendship Should never be broken Let's be in Peace	<b>G</b> rowing the world. Opening us up and bringing us together.	<b>H</b> elping the earth and is a good change	<b>I</b> magine our world, as a giant puzzle. We all have a piece, so we can choose to leave it out or put it in place.
<b>J</b> ust a scene of what used to be, painted over, as good as new. Forests burning, turned to a happy land by a single brush stroke of the hand.	<b>K</b> indness to earth, the animals live in peace By the water	<b>L</b> ove the world. We are all connected.	<b>M</b> ust make world better the animals so they took more brushes and glue and made the world happy	<b>N</b> o pollution stacked animals wind turbines future	<b>O</b> nions of tears fall from the biggest eye as we can't be saved.	<b>P</b> ollution is no more the picture opens up the future	<b>Q</b> uickly they dive, but the smaller fish fly.	<b>R</b> ocks covered in shadows, glows, made into a painting on the rocks, 4 wonderful people.
<b>S</b> ail with the wind, the sail is our boat.	<b>T</b> elling a story of peacefulness sharks swim!	<b>U</b> nder the sky, covered in the four seasons Animals in peace.	<b>V</b> arious birds and various sites the eye observes.	<b>W</b> hales like Dolphins, live in the beautiful sea. Take care of the world.	<b>X</b> ylophone of colors, makes the world bright	<b>Y</b> oung bugs close to strings of peace	<b>Z</b> ero the center from the center	

# みんながつくった カルタで遊ぼう！

上記は、エイトリウムスクール (USA) の生徒たちが、ワークショップを通して、絵を読み解きつくったカルタです。



## Workshop Design ④

# 水のオノマトペ

### Sound of Water

世界の水問題を扱う国際会議、世界水フォーラム（WWF）の会場において、世界の子どもたちそれぞれの暮らしと水を感じるワークショップを実施。フランスと日本の子どもたちが、一枚の絵を見て感じたことを「ザザー」「ジャッパン」「ポトツ」などのオノマトペで表現し、それぞれの水への感覚をわかちあいました。

「水のオノマトペワークショップ」実施場所  
2012年 同志社小学校（京都）  
2012年 Parc Chanot（フランス マルセイユ）



### 絵の中のオノマトペ

#### 絵の中の音を聞く



どんな音が聞こえてくるかな？  
1枚の絵をみんなで見て、感じた音をオノマトペで表現した。

#### オノマトペのタイトル



子どもたちが感じた水のオノマトペを絵のタイトルとして、展示用のキャプションをつくった。

#### 展示



子どもたちがつくったキャプションと一緒にポスターの絵が展示された。

### 皆の水、それぞれの水

#### 指筆で水を描く



カラフルな墨を使い自由に水を表現した。

#### フレームで切り取る



自分たちが描いた絵の好きなところにフレームをあてて切り抜いた。

#### 自分の「水の記憶」を書く



切り抜いた絵から連想する「水の記憶」を母語で書いた。

#### 大人に問いかける



シンポジウム参加者に、好きな水の絵を選び、自分の母語で「水の記憶」を書いてもらった。

#### 広がりつづける展示



いろいろな国の言葉で語られる「水の記憶」の絵を次々に展示していった。



## Workshop Design ⑤

# 絵本をつくる

### Edit Picture Book

世界の別々の場所で描かれた国連子供環境ポスターを使用した絵本づくり。絵の読み解きからキーワード出しを行い、絵を並べて新たな物語を紡ぎました。このワークショップは、台湾の国立台東大学の児童文学を研究する大学院生たちによって企画されました。

「絵本をつくるワークショップ」実施校  
2011年 国立台東大学附属小学校（台湾）

台湾の国立台東大学附属小学校の子どもたちによる、ポスターを使用したオリジナルの絵本作品。



#### ① 1枚の絵を選ぶ



原画を見て、その中から好きな絵を1枚選んだ。

#### ② 絵と向き合い、読み解く



選んだ絵をじっくりと見てワークシートに記入しながら読み解いた。

#### ③ 5Wで絵の読み解きを共有



What When Why Where Whoを絵から読み解き、見つけたものをポストイットに記入しワークシートに貼っていった。

#### ④ 思いつくストーリーを語る



グループに分かれ、自分たちの選んだ絵を並べ、まず主人公を決めるところからスタートし、絵を見ながら自由に思いつくストーリーを話していった。

#### ⑦ 絵本を仕上げる



挿絵を入れたり、装飾を加え、絵本を仕上げた。

#### ⑥ 試作版をつくる



ストーリーの大枠が決まったら、一人一人が選んだ絵に物語を書き、絵本の試作版を作成する。試作版を元に、再度ストーリーを調整し、最終版のイメージを決めていった。

#### ⑤ ストーリーを書き留める



絵を見ながら話したストーリーをグループのリーダーが書きとめていき、次第にストーリーの輪郭が見え始めた。





## 飯塚 宜子 (いづか・のりこ)

京都大学東南アジア地域研究研究所 研究員  
環境と平和の学びデザインマナラボ 代表

総合地球環境学研究所勤務後、同志社大学大学院総合政策科学研究科にて博士号取得（ソーシャル・イノベーション）し、2016年より現職。文化人類学者らや行政等と協働し、北米先住民クリンギット、アフリカ熱帯雨林の民など、土地に根ざす社会や文化の多様性を、都市の子どもたちが体験的に学ぶワークショップ・プロデュースとシリーズ化の運営を行い、生来的文化の視座からの環境教育を提唱している。京都外国語大学非常勤講師。

## 大西 景子 (おにし・けいこ)

BOX & NEEDLE 代表  
ラーニングデザイナー

こどものミュージアムにて、ワークショップやキットの開発を行う。独立後、まなびをテーマにした企画を行う。2009年に創業100年続く京都の貼箱工房の職人の技術と世界の紙を合わせたブランドBOX & NEEDLEを立ち上げる。世界のクリエイターと連携して、オリジナルの紙の開発を行う。また世界各地でワークショップや講演を行い新しい学びのスタイルや伝統工芸の可能性を提案している。

## 曾和 具之 (そわ・ともゆき)

神戸芸術工科大学 デザイン学部  
准教授

1973年、神戸生まれ。神戸芸術工科大学大学院芸術工学研究科准教授。高知大学理学部物理学科卒業後、千葉大学大学院にて多様性科学を専攻。学術博士。専門分野はコミュニケーションデザイン。高度情報化社会におけるプロセスの記録方法に関する教育・研究活動を行いつつ、2008年からは棚田の稲作活動を通して持続可能な農デザインの可能性を探っている。

## 地球への感性 vol.2

国連子供環境ポスターによる学びの実践

編著 阿部健一、飯塚宜子、三宅由莉、佐藤優香

レイアウトデザイン 三宅由莉  
イラスト 夏目奈央子、いわた花奈  
発行 総合地球環境学研究所  
発行日 2017年3月30日

## 阿部 健一 (あべ・けんいち)

総合地球環境学研究所  
教授

専門は環境人類学、相関地域研究。もともと熱帯林に関わる研究を行い、生物学的な関心だけでなく、そこに住む人々の生活、地域の経済や社会構造、さらには政治環境についても関心を深めてきた。現在は環境人類学、相関地域研究を専門とし、熱帯林に限らず、広く環境問題をめぐる国家の利益や人々の生活の変化、さらには価値観の転換などについても考えるようになっている。

## 小林 舞 (こばやし・まい)

総合地球環境学研究所  
研究員

大学卒業後、カリフォルニア州や中米のニカラグアで、環境教育に携わり、アグロフォレストリーやパーマカルチャーを学ぶ。京都大学地球環境学舎にて修士・博士課程修了。2016年より現職。「持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築—食農体系の転換に向けて」プロジェクトの研究員として働いている。持続可能な農村発展、小規模農業と食文化の転換を主に日本とブータンをフィールドとして調査研究を続けている。

## いわた 花奈 (いわた・かな)

デザイナー／イラストレーター

グラフィックデザイナー、テクニカルイラストレーターとして制作プロダクションを経て2005年、独立。「みえと、うごく」を軸に、概念を図で伝えるデザイン、イラストレーション業務に従事。また企業だけでなく教育機関などの様々な分野に「デザイン発想」を提案すべく、ワークショップやアクティブツールデザインの企画、開発、実施までを行う。  
<http://active-tool-design.tumblr.com>  
アトリエ・カプリス <http://dzukai.com>

# Workshop Design Members

## 佐藤 優香 (さとう・ゆうか)

東京大学大学院情報学環  
特任助教

国立民族学博物館講師（機関研究員）、国立歴史民俗博物館助教を経て2012年より現職。専門は学習環境のデザインと博物館教育。博物館におけるコミュニケーションについて歴史と実践のふたつの手法で研究。博物館や小学校におけるワークショップやコミュニケーションのためのツールを多数デザイン。共著書に『協働と表現のワークショップ』（東信堂）、『学校と博物館でつくる国際理解教育』（明石書房）など。日本博物館協会棚橋賞「日本子ども学会優秀発表賞」受賞。

## 三宅 由莉 (みやけ・ゆり)

trois maison 代表  
デザイナー／UXプランナー

学習環境と教育メディアのデザイン開発研究に携わる。多摩美術大学での副手勤務後、広告会社にて広報誌の編集デザイン、アートディレクションに従事。2002年デザインスタジオ「trois maison」を設立。エディトリアル、ワークショップツール、UXプランニングを中心にラーニング関連のデザインワーク多数。  
<http://troismaison.org>。  
デザインと学びの研究所 un labo.  
<http://undesign-salon.jimdo.com>

## あとがき

本書を再編集するにあたって、あらためて国連子供環境ポスターをこうして教育に活用することになったことを振り返ってみた。二つのことを思い出した。ここに書きとめておきたいと思う。

### 審査会の楽しさ

ひとつは、最初に審査会に参加した時のことだ。1998年に、国連子供環境ポスター展の最終審査をするメンバーに選ばれ、毎年一回審査を担当することになった。これがとても楽しかった。毎年1万点を超える応募作品は、国連の6つの地域事務所ごとに100点に絞られ、最終審査の会場に送られる。会場は国連環境計画（UNEP）の本部のあるナイロビであったり、スポンサー企業の本社のあるヨーロッパや日本であったりする。600点の作品を会場に届け、2日ばかりで、10人ほどの審査委員がすべてに目を通す。審査は段階的に進められる。まずは地域ごとの審査。ひとりひとりに10枚のカードが配られ、これはと思う作品の上に置いておく。禁じられてはるわけではないが、委員の間での会話はほとんどない。いいと思う作品を、神経を集中してひたすら選んでいく。疲れるが、悪くない。楽しい作業である。しかし、もっと楽しいのは、委員の間で意見交換をする次の段階である。複数のカードが重なる作品もあれば、一枚だけのものもある。なかには、誰がこんな絵を選んだんだ、と思うような作品もある。その誰かが、選んだ作品の素晴らしさを説明するのが次の段階だ。ヨーロッパの委員は、明確な主張が込められているかどうか判断基準である。僕が選んだ作品は、言いたいことがはっきりしていない、と指摘されることが多い。「いや、隠されたメッセージを読み解かなければならない」と反論し、少しいきりたって、作品の解説をすることになる。「神は細部に宿るのだ」なども言ったりする。

アフリカの委員は地元びいきである。それも悪くない。画用紙ではなく粗雑な紙に描かれた稚拙な線描の作品を選んで、「……絵の具の買える子はまだ恵まれていると思う」。逆に、アジアの作品には、指導が行き届いているな、と思われる見事な絵が多い。子どもたちの絵には、彼らがおかれた状況がにじみ出ている。

ほかの委員の作品の読み解きに耳を傾け、世界の子どもたちが描いたそれらの環境問題について考えながら、全員の意見が一致するまで議論をし、優秀作品を選ぶ。絵を通して、互いの文化的背景に想いを馳せたり、自身の感性を見直す機会は、くたくたになるが、とても心地よく、有意義な時間である。こうした審査会を重ねることに、この経験を子どもたちと共有したい、と思うようになった。これが国連子供環境ポスターを用いてワークショップをできないかと考えたきっかけである。

### 空気を一変させた絵の力

その後、当時、国立民族学博物館で、教育普及を行っていた、佐藤優香さんに相談し、一連のワークショップをはじめることとなった。次に思い出すのは、その最初のワークショップのことだ。

休日の午後、体育館に集められた愛媛県の松山市立桑原小学校の生徒は、そわそわと落ち着きがなかった。以来ずっとワークショップに関わってくれている仲間が、丁寧に段取りの説明をしている。それでも子どもたちは、何をさせられるのか、いぶかしげだった。僕は何の役にも立たないので、体育館の2階の回廊から会場の様子を眺めているだけだった。会場の空気が一変したのは、梱包されていた100点のポスターが、子どもたちの目の前に開かれたときだった。

「好きな絵を選んでらん」。

佐藤さんのこの一言で、静かだった体育館がたちまちにぎやかになった。あちこちで会話が始まり、笑顔があふれた。僕は、2階でカメラをかまえながら、あまりの雰囲気の変化に呆然としていた。

それが16年前であり、「絵の持つ訴求力」を活かして世界のことを知ることはできないだろうかと考えたり、子どもたちののびやかな感性をそのまま保てることのできたら環境問題などなくなるのでないかと思ったりするようになったのは、少し後になってのことになる。



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所  
Research Institute for Humanity and Nature

